※安城市歴史博物館企画展図録「戦争のなかに生きる」から抜粋

今に残った零戦

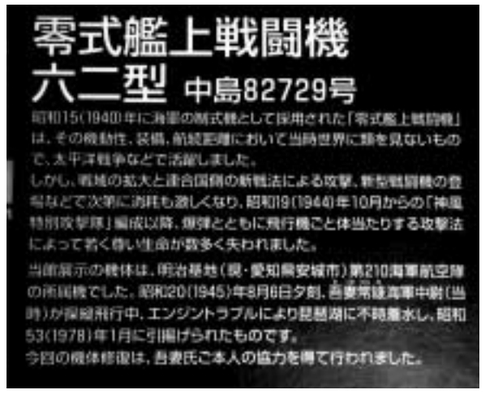
呉市海事歴史科学館に展示されている零戦は、吾妻常雄（あづまつねお）海軍中尉（当時）の機体でした。吾妻氏は昭和20年2月28日に明治基地に着任。この地で終戦を迎えました。

吾妻氏の基地の思い出（※）

『新川町駅（名鉄三河線）まで列車で行き、基地まで歩いていきました。途中、沿道の多くの民家が、傾いていたのに気づきました。後で聞いたところでは、大きな地震があったそうですが、私は、この地震は経験していません。

明治基地のはじめての印象は、桃の花が咲くなど、のどかな農村地帯で、戦争がなければ桃源郷（きょう）みたいなところでした。』

『明治基地では、南門（現明祥中学校正門）近くにあった士官宿舎に住んでいました。これは、木造のバラックでした。この建物に海軍兵学校の同級生数名と一緒に寝起きしていました。けれど、アメリカの艦載機の空襲が激しくなると、川（長田川）を渡ったところの半地下式の分散兵舎に移りました。結局、終戦までこの兵舎で過ごしました。』



展示中の機体と展示説明の一部

吾妻氏の機体は、8月6日、琵琶湖上空を飛行中、エンジントラブルにより不時着水。その機体は、昭和53年に引き上げられました。終戦後、明治基地にあった零戦を始めとする航空機は、焼却処分されています。このため、この不時着水した機体が、明治基地に所属した航空機のなかで、唯一現存するものとなったのです。

吾妻氏の回想（※）

『高度を下げ、湖面に向かって機銃の試射も終了し、竹生島を右下方に見ながら旋回すると、「ああきれいな島だなあ」という思いが一瞬頭をよぎりました。そして、米原方面に機首を向けて帰途につこうとしたときに、いきなりエンジンが停止しました。

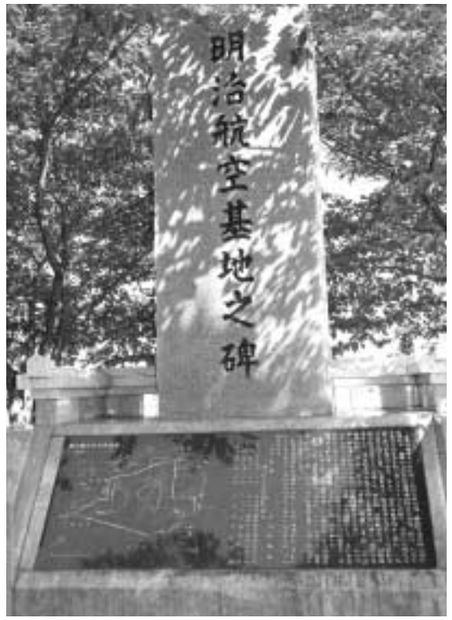
低高度だったので、すぐに不時着水を決意しました。このような緊急事態に遭遇すると、今までに教えられていたことが、次々に頭に浮かんできました。風防を開け、ベルトを外して、不時着水しました。』

『私が明治基地を去る際、零戦は全機プロペラを外した状態で、滑走路に並べてありました。武装解除したのですね。そうした上を、アメリカ軍の飛行機が悠々と飛んでいく。悔しかったですね。それでも、「俺の愛機は琵琶湖の中だ」なんて負け惜しみをつぶやいたりしていました。

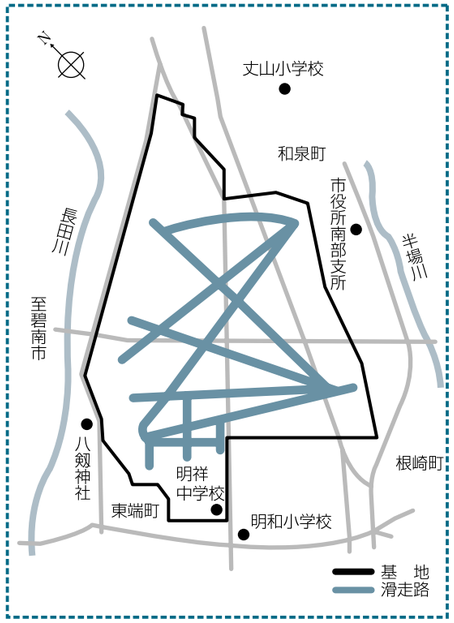
それが昭和53年に琵琶湖から引き上げられ、33年振りに愛機と再会することができました。その日は、私にとって感激の一日となりました。』

明治基地での吾妻氏

今も残る基地の跡



明治航空基地之碑



基地を現在の地図に重ねた様子

太平洋戦争末期、碧海郡明治村の一角（現在の東端・根崎・和泉町付近）に約200ヘクタールの航空基地が建設されました。これが明治基地（正式名称・明治航空基地）です。基地の工事は昭和18年4月に始まり、翌19年5月ごろから完成半ばではありましたが、使用を開始。土木機械の導入が遅れていた当時、建設工事は人海戦術で行われ、近隣の中等学校の生徒も動員されました。

しかし、その後まもなくして終戦。用地は元の地主に払い下げられ、開拓により、広大な敷地が再び農地へと姿を変えたのです。

今でも、広い敷地跡に点在する貯蔵庫や弾薬庫跡から、当時の様子をうかがうことができます。しかし、戦後62年が過ぎ、当時の記憶も薄れつつある現在。あと何十年もすると、これらの遺跡が一体何のために作られたものなのか、分からなくなってしまう恐れもあります。

弾薬庫跡（右・下）　今もレンガ積みの壁面が残っている。

油缶貯蔵庫（左・上）　正面と後ろから見た様子。当時は土に埋もれていたが、現状ではその姿を見ることができる。